

川越さん親子（中央）と本園さん一家

一与論町古里



# 温かい人透き通った海…充実の高校生活 与論留学感謝 募集に協力

## 横浜出身・川越さん

14歳で横浜市の親元を離れ、与論島で暮らす少女がいる。島の人の温かさや、透き通った海に魅せられて単身移住してきた与論高校3年の川越夢津美さん(18)。充実した日々を過ごした与論に恩返しすることを誓い、4月から東京の大学に通う。夢津美さんの「島留学」をきっかけに、人口減少に悩む与論町は、関東や関西に住む生徒を島に呼び込む動きを本格化させる。

2日にあった与論高校の卒業式。保護者席に横浜市から訪れた母純子さん(45)の姿があった。隣には与論で父親代わりだった本園秀幸さん(41)。カメラを構えた本園さんがピースサインを送ると、入場してきた夢津美さんに笑みがこぼれた。

◆ 神奈川県で育った夢津美さんは、シングルマザーの純子さんの仕事の都合で、中学2年で横浜市に転居した。それまでバレーボール部に入っていたが、途中で新しいチームに加わることにためらいがあった。次第にファミレストフード店やゲームセンターを転々とするようになり、「刺激的な生活」が続いた。

## 町、人口増へ呼び込み本腰

合で、中学2年で横浜市に転居した。それまでバレーボール部に入っていたが、途中で新しいチームに加わることにためらいがあった。次第にファミレストフード店やゲームセンターを転々とするようになり、「刺激的な生活」が続いた。

いながら1カ月過ぎずと、与論に夢中になっていった。「いろいろな大人と出会い、世界が広がった。方言が飛び交う地域の人のとろけ合いは温かいが、毎日きれいな海で遊ぶ。都会にはない刺激的な生活だった」

本園さんの「任んじやえは」という言葉で移住を決めた。2011年4月、与論中学校に転校。問題は、夢津美さんが希望した与論高校への進学だった。当時の町教育長、田中 國重さん(72)によると、県教育委員会は与論高への進学に難色を示した。当時は、保護者が住む「通学区域(学区)」内の県立普通科高校に進学する規則があったからだ。町は少子化で生徒が減っている与論高にとって

純子さんは仕事が忙しく、帰宅するのはいつも夜。1人で過ごすことが増えた夢津美さんの頭に浮かんだのは、以前、純子さんと旅行で偶然訪れた与論島の民宿「楽園荘」だった。

楽園荘は本園さん一家4人が切り盛りする。バックパッカーや修学旅行の引率教諭、近所の人々がひっきりなしに出入りする。大家族へのあこがれもあり、中2の夏休みを使って1人で訪ねた。住み込みで民宿を手伝

えは」という言葉で移住を決めた。2011年4月、与論中学校に転校。問題は、夢津美さんが希望した与論高校への進学だった。当時の町教育長、田中 國重さん(72)によると、県教育委員会は与論高への進学に難色を示した。当時は、保護者が住む「通学区域(学区)」内の県立普通科高校に進学する規則があったからだ。町は少子化で生徒が減っている与論高にとって

高に入学した後、県外の中学生が鹿児島島に進学するハードルは大きく下がった。

◆ 与論高の入学者はこの15年で半減し、本年度の在校生は160人。危機感を募らせる町教委は4月から、関東や関西地区などの大都市圏に向いて、生徒獲得に本格的に乗り出す。

配布するパンフレットには、与論の魅力や夢津美さんの体験記を掲載。教育大使として町に協力する夢津美さんは、将来は観光業に携わり、与論に帰るつもりだ。

与論島で高校3年間を過ごした福岡県大牟田市出身の奥野喬介君(18)が1日、卒業式を迎えた。「与論独特の環境の中、友

達と過ごせてよかった。楽しかった」と充実感を口にする。ともに、受け入れてくれた島の人々に感謝の気持ちを表した。

喬介君が初めて島を訪れたのは中学2年生の時。大牟田与論会との縁で交流事業があり、同級生と一緒に参加。島が気に入って、翌年にも同級生と2人で1週間ほど滞在した。

### 与論島

期があり、変わるきつかけがほしかった。海が好き。よく有明海などで釣りをしていたので、環境的にぴったりだった」と母・陽子さん(46)。息子の願いをかなえてあげたいと、島への留学手段を探した。

鹿児島県では当時、県立高校普通科に県外から

## 感謝の支えの周

### 島留学の奥野君が高校卒業

の生徒を受け入れる制度がなかった。「本人や保護者の熱意に応えたい。生徒数が減少している与論高校にとっても、県外からの生徒受け入れの門戸を開いてほしい」と、田中國重前町教育長(73)をはじめ地元関係者が県教委に掛け合い、特例での受検が認められた。受け入れ先は民営「星砂荘」に決まった。



与論高校を卒業した奥野君親子(中央)と星砂荘の永井さん夫妻—与論町

にも精を出し、充実した3年間を過ごした。卒業後は東京で電気工事の仕事を就く。卒業式があった1日の夜は、喬介君の受け入れに関わった島民が集まり、ささやかな卒業祝いが開かれた。

島での保護者代わりだった星砂荘の永井新孝さん(52)は「感無量。縁があつてここまで来た。この縁を大事につなげていけるよう頑張つてほしい」、妻・みさ代さん(54)は「卒業してくれてうれしい。東京で頑張つて仕事してほしい」と励ましの言葉を掛けた。

喬介君は「いろんな事があつた。与論の父、母に対して、迷惑も掛けたけど、いいこともたくさんあつた。東京へ行ってからもたまには帰つてきたい」と感謝した。

県教委は2014年度入試から県立高校の通学区域に関する規則を一部変更。熊毛・大島学区や募集定員が120人以下の普通科について、県外

を合め学区外からの受検が可能となった。少子化に悩む与論町では15年度、島外からの転入学者に生活補助や受け入れ先の紹介などを行いサポートする留学制度を立ち上げた。16年度は同制度を利用し、1人の生徒が入学を希望している。

与論高校では14年度にも、特例で入学を認められた県外出身者1人が卒業している。町岡光弘町教育長は「2人が島留学のいい道筋をつくってくれた。与論島」であり、今後地元の人と一緒に育つて、地元よさを生かした取り組みをしていきたい」と力を込めた。

(沖永良部総局)

# ふるさと留学生が入学

## 綿貫さん「人の優しさ魅力」

### 与論高校



鹿児島県立与論高等学校

# 入学式

【沖永良部総局】与論町が2015年度に導入した「ふるさと留

立條崎第二中学を卒業した綿貫桃花さん(15)。親元を離れて過ごす島での新生活に、期待と多少の不安も入り交る中、入学の日を迎えた綿貫さん。人の優しさが魅力」と感じる与論島の高校生活を、笑顔でスタートさせた。

同町のふるさと留学制度は少子化が進む中、与論中・高校の全与論町ふるさと留学制度の第1号生徒として、与論高校に入学した綿貫さん(中央)。父の信行さん(右)、里親の本園さん(左)、与論町

学年2学級存続を目的に、沖縄県立久米島高校などの先進地を参考として15年度に創設した。

里親制度や親子留学など多様な形態に対応、里親制度の場合は保護者の負担軽減のため、生徒1人当たり生活補助として里親に月3万円補助が行われる。

綿貫さんは08年に家族で初めて与論島へ来島。島の人の温かさ、自然の豊かさなどにひかれ、以降、毎年家族で訪問。里親を買って出してくれた、民宿・楽園荘を営む本園秀幸さん(43)もその頃から

の付き合いで気心の知れた仲。綿貫さんは「島の人の親切な人柄に触れ、そこに住むことで私も見習いたいと思った。

不安がないわけではなく、(里親も)よく知っている人なので、きっと大丈夫と笑顔。在学中、島の方言の習得にも意欲的だ。

父親の信行さん(49)は「東京より与論島の方がはるかに安心。その意味で心配していない。島で自由に伸び伸び生活してくれたら」。里親の本園さんは「これからは家族。責任を持って見守ることはもちろん、せっかくなので島の高校に通

うのであれば、ここで将来の目標なども見つけてほしい。そのための手助けもしてあげたい」と話した。

同町教委によると、パンフレットの更新・島外配布や、町ホームページなど活用し、今後も積極的にふるさと留学制度を発信。里親の確保など課題もあるが、将来展望として10人程度の留学生が常時在学している状態を目指すという。